なることが多いとされる．高頻度に再発するとされ，長期間の経過観察が必要とされる．

9）メッケル憩室に合併した腺癌による穿孔性腹膜炎の1例

中塚　英樹・坪野　俊広
石崎　悦郎・酒井　靖夫（済生会新潟第二病院 外科）
相場　哲朗・川口　正樹

症例は62歳女性，主訴は右下腹部痛．子宮筋腫にて子宮，左卵巣摘出術，虫垂切除術を施行された既往あり．2000年2月21日右下腹部痛が出現した．近医受診し内服処方されて帰宅したが改善なく，2月26日当院内科受診し，腹膜炎の診断で入院となった．入院時下腹部全体に鈍痛を認めた．圧痛は軽度で筋性防御を認めなかった．腹部 CT で下腹部から骨盤正中に小腸に取り囲まれ，被包化した液体貯留を認めた．消化管穿孔による腹腔内膿瘍の診断で緊急手術となった．開腹すると盲腸より35 cm 口側の回腸に憩室を認め，その頂部にはゴルフボール大の腫瘍が存在した．メッケル憩室に発生した癌の穿孔による腹膜炎の診断で病変部の小腸約60cm を切除した．病理組織所見は Adenocarcinoma，por-solid and non-solid with sig.＞＞mod，ly 2，v 0，ss，n（－）で，憩室内は腫瘍組織で置換されており，明らかな胃粘膜は認められなかった．メッケル憩室に合併した癌の報告は稀であり，興味深い症例と考えられるため考察を加えて報告する．

10）非治癒切除後，放射線治療が奏効した小児S状結腸癌の1例

金田　聡・岩渕　眞
内山　昌則・八木　実（新潟大学小児外科）
飯沼　泰史・大滝　雅博
杉田　公（同 放射線科）

【症例】12歳女児【主訴】不正性器出血，下血【家族歴】兄と妹が神経膠芽腫で死亡【経過】12年7月より主訴あり．精査で巨大骨盤内腫瘍を認め，入院．試験開腹にて低分化型腺癌の診断であった（CEA 0.9 ng/ml）．8月25日手術施行，腫瘍は仙骨前面に広範に浸潤し非治癒切除であった．術後，残存腫瘍の増大，疼痛増強したため放射線療法を施行したところ（計59.4 Gy），腫瘍は縮小し疼痛も軽減，QOL の著しい改善をみた．現在，腫瘍は残存するが，退院して鎮痛剤も服用していない．

【まとめ】小児大腸癌を報告した．本症は小児の発生率が低く，進行例が多いため，予後不良である．本症例でも，手術は非治癒切除に終わったが，放射線療法がQOL の改善に有用であった．

11）小児胆石症7例の検討

大橋　祐介・新田　幸壽（新潟市民病院 小児外科）
内藤　眞一・荒井　洋志
斉藤　英樹・大谷　哲也（同　外科）

平成5年より現在までに小児胆石症を7例経験した．年齢は10ケ月から11歳（平均5.7歳）．7例中6例が胆石症の誘因となる基礎疾患を有していた．胆石による症状を認めたのは5例で，全例に手術を施行した．無症状例2例は基礎疾患観察中に胆石を指摘されたが，手術は施行せず，現在，外来経過観察中である．小児胆石症は比較的まれな疾患であり，また，その成因等，成人胆石症と異なった特徴もみられる．小児胆石症の特徴を加味し，その治療方針を中心に文献的考察を加え報告する．

12）immature ganglionosis を伴っていた臍帯ヘルニアの1例

内藤万砂文・広田　雅行（長岡赤十字病院 小児外科）

immature ganglionosis を伴った臍帯ヘルニアを経験した．術後9ケ月を経過し順調な発育を示しているので報告する．

【症例】0日　女児

35W 4 D，2293 g，C/S にて出生．臍帯ヘルニアを認めその下方に穿孔があり腸管が脱出し，回腸に穿孔がみられた．回腸部分切除し腹壁を一期的に閉鎖した．病理検索では虫垂，回腸ともに ganglion cell は小型，未熟で数も半減していた．術後も腹満が続き15病日に再開腹し回腸ストーマを造設した．1歳1ケ月の注腸検査では大腸は細いが弱い蠕動運動があり，使用可能と判断した．1歳3ケ月にストーマ閉鎖術を施行した．病理検索ではストーマより口側の腸管の ganglion cell はほぼ正常であったが肛門側のそれは半減し未熟性を残していた．術後トラブルなく29病日に退院した．現在1歳10ケ月になるが体重も9 kg を超え，1日数回の良好な排便が得られている．